

1. 地域社会における子どもの臨床福祉的研究

—子どもの遊びの活性化を中心に—

児童家庭福祉研究部 高橋種昭(客員研究員), 須永 進
坂本 健
淑徳短期大学 中川英一・高林孝志
全国児童館連合会 鈴木一光

要約:

今日、子どもの心身の健全な発達に欠かせない遊びが地域社会の環境悪化や生活条件の変化に伴い内容的に限られたものになり、その機会も失われつつある。本研究ではそうした状況にある子どもの遊びの活性化を担う場として児童館活動の現況を明らかにしてきた。その結果を踏まえながら今回は子ども自身の考える遊びや児童館などについて調査する一方で、積極的に児童館活動を展開しているケースをいくつか取り上げ、考察を試みた。それによると、それぞれの地域の実情を踏まえながら、遊びを中心に特徴ある活動を展開している児童館や新たな試みを実践している児童館などが見られる反面、来館する子ども自身が抱える問題への個別的対応をはじめ学校・地域社会とのかかわりをどう進めていくべきか、といった今日的な課題に直面しているケースの少なくないことが明らかになった。子どもの生活空間としての遊び環境が次第に変化する中で、それを保障するための児童館の果たす役割は今後極めて大きくなることが予想される。そのためにも子どもの視点やニーズ及び地域とより密接に結びついた児童館活動が強く望まれている。

見出し語：地域社会、子どもの遊び、児童館

A Clinical Study of Welfare for Children in Community

Taneaki TAKAHASHI, Susumu SUNAGA
Takeshi SAKAMOTO
Eiichi NAKAGAWA, Takashi TAKABAYASHI
Kazumitsu SUZUKI

The children's play in need of the sound development today, is restricted and the chance is losing with the change of community and our life style. This study cleared the activity of the children's hall where discharge its duties of making active children's play. This time, we investigated the children's needs of play and children's hall, and that attempted to examine some of case studies. The result's as follows; Some of children's halls offered for children to play of interest or tried to new activities. The other halls faced to topics of the day how to deal with the problem of children themselves and communicate to the school and community. With the change of children's environment as the life spece, it'll be important for children's hall to fulfill its duties from now on. We request strongly to make children's hall correspond with the needs, viewpoints of children and closely contact to the community.

Key Words: Community, Children's play, Children's halls

はじめに

近年子どもの生活環境は急速な都市化の進行に伴って変容を遂げてきた。例えば、子どもの生活基盤であった地域社会（コミュニティー）の形成が困難になり、その結果従来から受け継がれてきた地域の教育力は大きく低下し、自然発生的な子ども集団がほとんど成立しえなくなっている。それはただ単に生活環境の変化といった単純なものではなく、子どもの社会性や協調性という発達面に少なからず影響を及ぼすに至っている点において極めて深刻な状況を作り出している。

こうした子どもを取り巻く環境全体の変貌の中で、新たな子どもの生活環境づくりを早急に実現しなければならない。そういった意味から今日地域にあって失われつつある遊びや子ども集団を意図的に再構成しようとさまざまな活動に取り組んでいる児童館は極めて重要な役割を担っている。

このような認識に立って、本年度は以下のような目的と方法によって調査研究を進め、研究目的の達成に努めることにした。

研究目的・研究方法

我々はこれまで、今日の児童館の現況をはじめ、来館児童の実態や主に児童厚生員の意識などについて調査及び研究を進めてきた。本年度においては、さらに地域の子どもの遊びや児童館に対する考えを調査し、改めて子ども自身の持っている遊び意識や地域の中の児童館へのかかわりについて明らかにしようとした。また、こうした結果を踏まえながら、現在児童館活動を積極的に行っているいくつかのケースを取り上げ、検討することによって現在抱えている課題や今後あるべき児童館の方向性に言及することを目的に据え調査研究を実施した。

まず、子どもに対する調査では、質問紙を使い、今日の子どもの遊びを中心に友達との関係や地域にある児童館について質問を行った。また、ケース研究では東京の児童館をはじめ併せて4つの活動事例を取り上げ、検討を加えた。

以上の調査研究による結果及び考察に関しては次の通りである。

I章 児童館についての子どもの意識

児童館のこれからのあり方を探るために、前年の児童厚生員に対する調査に続き、今年度は利用の主体である

子ども自身が児童館についてどのように思っているかについての調査を実施した。これまでの研究によって、児童館側と子ども側では、児童館に対する期待において、若干の相違の生じていることが明らかになった。そこで本調査を通して、子どもからみた児童館への意見を探ることにより、子どもを主体とした児童館活動へ近づけるための課題を考察した。紙面の都合上本章では、遊びの実態と児童館活動への意見という二本柱を中心として検討を進めたい。

① 遊びについて

小学生を対象に、大学生の調査員が面接する方法で行なった。首都圏を中心としたもので、平成5年1月から4月にかけて調査を実施、577名の有効回答を得た。

遊びについて、全体の $\frac{3}{5}$ が「遊ぶ」とこたえ、「遊ばない」は $\frac{1}{5}$ である。性別では、男子の方がやや「遊ぶ」と答えた者の割合が高い。学年別にみると、学年が高くなるにつれ「遊ぶ」の割合が低くなっていく。「遊ぶ」と答えた子どもの割合は、低学年80%、中学年70%、そして高学年になるとさらに低下し、小学5年生60%、小学6年生50%という状況である。とくに小学6年生では「全く遊ばない」という子どもが4人に1人の割合である。これは小学生の多くが学習塾やスポーツ・芸術関連の習い事に通っていることと関連が深いようである。

遊び相手については、性別による違いは見当たらない。学年別では、小学1年生を除き、年上の子どもと遊ぶことは少ないようである。学年が上がるにつれ、同学年の友達と遊ぶ傾向が強いようである。子どもたちのタテのつながりが縮小している現実が伺われる。

遊び場所については、公園・自宅・友達宅がそれぞれ3人に1人の回答である。性別にみると、自宅で遊ぶ割合が男子29.9%に対し女子が38.1%と高くなっている。児童館という回答は全体の5%弱であった。地域によって児童館の設置状況などの違いもあり比較はできないが、決して高いとはいえない数字ではないだろうか。遊びの内容では、性別による違いがみられる。典型的なのは男子の「ファミコン」、女子の「おしゃべり」である。高学年の女子ではとくにその傾向が強いようである。また小学3年生から5年生へと学年が高くなるにつれ、外で運動遊びをする子どもが多くなっている（ただし小学6年生では幾分低くなる）。

一方、遊ばない理由としては、「塾や稽古事が忙しい」と「仲間がいない」が20%をこえている。学年が進むにつれ「塾や稽古事が忙しい」の回答が増えている。「仲間がいない」は東京23区で35.3%と高く、大都市にお

いて年齢をこえた子どもたちのグループづくりをすすめる必要性が強く感じられる。つぎにそのような施設として期待される児童館に対する意見について考察する。

② 児童館について

児童館の利用状況については、「日常的に利用する」9.0%、「時々利用する」28.6%、「児童館には行かない」62.4%となっている。学年別にみると、低学年では日常的に利用する子どもの割合が20%近くと高くなっている。しかし学年が上がるにつれ、日常的から時々に移行し、少しずつ児童館から遠のいていくようである。高学年の子ども達が楽しく利用できるような魅力ある施設環境の整備や、プログラムの工夫が求められるが、その一方で塾や習い事など時間におわれる生活から子どもの生活時間を守ることにについては、児童福祉サイドだけでは解決できない問題である。

児童館を利用している子どもに、児童館への思いや要望をたずねた。まず印象については、性別に関わりなく男子女子とも半数の子どもが「楽しい」とこたえている。学年別では低学年の子どもにその傾向が強いようである。こうした結果は、児童館が、小学低学年の子どもたちの遊びの施設として機能していることを示すものとして考えられる。一方不十分な点としては、「狭い」という声が男子や、高学年の子どもの中で多数みられた。従来の児童館は主として低学年の子どもたちをターゲットとしてつくられてきているが、これからは高学年の子どもや、中・高校生の利用にもこたえられるような物的・環境条件の整備をはかっていくことが強く求められている。

児童館に通所する子どもの意見をみてきたが、ここで児童館へ行かない理由についても検討しておきたい。児童館へ行かない理由として上げられた意見は、「近所がない」40.3%、「どこにあるのかしらない」25.6%である。いずれも利用する子ども側からすれば児童館へのアクセシビリティの問題である。地理的状況の違いがあり一概にいえないが、地域により児童館の整備状況に違いがあるように見受けられる。遊びを通して地域の子ども達の健康な発達を促進するための重要な役割を担っている児童館の位置づけを再確認し、適正な配置をもって整備がなされることを期待したいものである。もちろん児童館側のPRのあり方についての検討も不可欠である。そして何よりも活動内容を高めることによって、子どもたちの期待に応えることが第一に求められる課題である。

II章 児童館の現場からの報告

わが国の児童館は、その地域、その児童館により活動の内容や施設において大きな違いがみられ、その実態は様々であり、年を追う毎に増大する社会的需要の受け皿としての機能を十分に発揮している児童館がある一方で、児童館本来の使命を忘れ、単なる保育施設としての機能しか発揮していない児童館が未だにあることも事実である。そこで今回は、わが国の児童館の中でも、その活動において非常に高い評価を受けている4ヶ所の児童館のベテラン児童厚生員に、活動の状況や問題点などについての率直な報告を得ることにした。以下はその報告である。

報告1. 現在の児童館の活動状況

東京都杉並区立上荻児童館
館長 鈴木 雄司

現在、東京には約570の児童館が設置されている。各地で職員と地域住民、ボランティアによって子どもたちの放課後の生活を豊かにするために様々な活動が繰り広げられている。

子どもにとって児童館は地域の遊び場であり自主的な活動を行う拠点である。地域での子どもの成長を支え、子どもの文化を創造する上でこれまでに一定の役割を果たしてきた。同時に地域の子どもの活動を通じて、地域コミュニティの形成や行政課題の解決に力を注いできた。子どもの問題が深刻化するだけに地域での児童館の果たす役割は一層重要になってきている。

しかし、児童館は今だに十分な社会的認知を受けていない。乳幼児や小学生の子を持つ親を除けば、「児童館は何をするところ」といった声が児童館の近隣からでも聞こえてくる状況である。児童館の活動内容と問題点、今後の展望を考えてみたい。

1. 児童館の活動

児童館は地域の子どもの活動拠点であり、地域のあらゆる年齢層が利用できる施設でもある。主な活動をいくつか紹介したい。

* 乳幼児と母親の活動

全国的に活動が取組まれている。乳幼児の活動は、遊び場がなく友達との遊びを奪われた小さな子どもたちにとっては貴重な出会いと交流の場である。母親には子育てへの不安や悩みを語り、お互いのことを話し合う場となっている。また児童館においては具体的に児童館を理

解する住民であり、将来児童館を支える大人たちの層でもある。1・53ショックを受けて、厚生省は本格的に子育て支援政策を打ち出してきた。今後も児童館の中では位置付けの高い事業である。

＊小学生を対象とした活動

児童館は1～18歳を対象としているが中心は小学生である。日常の活動は児童館の遊び場としての機能を生かして子どもたちは自由な遊びを楽しんでいる。職員は子どもたちと関わりながら、遊びにつきあったり、サポートしたり、リーダー役割を演じながら子どもたちが楽しく遊べるように配慮をしている。さらに、工作・ゲーム・絵本の読み聞かせなど子どもの興味に合わせたプログラムを企画立案し、実施している。形態は誰でも参加できるつどい形式から、メンバー制をとったクラブまで様々である。定例の活動に加えて、子どもたちが地域の大人の援助を受けて創り出すキャンプやお化け屋敷、もちつき大会などイベント的な行事も組まれている。それらは子どもたちが最も活躍する場でもある。

＊中・高校生を地域の中に

利用は少ないが中・高校生を対象とした活動も始まっている。地域社会の中で彼等の積極的な活動をサポートする施設が児童館でもある。

日常の中では時間を延長して中・高校生の特別の時間帯を設け、利用を促進したり、あるいは児童館で合宿をして中・高校生たちの交流を図ったりしている。また、彼等の要求に合せライブコンサートを企画したり、子ども駅伝大会への参加を呼び掛け、地域社会の中に中・高

校生の活躍できる場を用意している。

今後、中・高校生の問題は児童館活動にとっても大きなウエイトを占めてくると考えられる。

＊地域と連携して

子どもの問題が深刻さを増すにしたがい、地域社会と連携のもとに児童館活動を押し進めることが大きな課題となってきた。地域との関係は児童館の近隣へのあいさつから始まり地域団体との共催まで様々である。子どもまつりを小学校やPTA、青少年委員や民生児童委員との協力で実施したり、餅つき会を地域の町会の力を借りて開催したりしている。当初は事業の趣旨理解で始まるが、回を重ねるごとにお互いに地域の子どもの問題にまで話が進むようになる。こうして児童館の活動を常に地域社会と結びつける活動が現在では進展している。

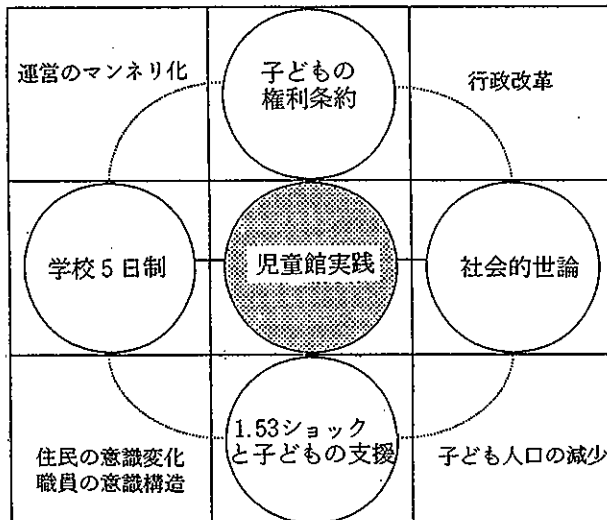
＊子どもの視点からの地域づくり

地域が荒廃してきている現在、児童館が子どもの側に立って地域づくりを進める核になる必要がある。まだ事例は多くないが、最近では地域の実態調査などに取組み、地域環境の実態を明らかにする活動が生まれている。環境問題を地域づくりとドッキングさせ、子どもの活動に結びつける実践は近年の先駆的なものである。

2. 児童館の直面している問題

児童館は地域の子どもたちに遊びと自主的な活動の場を提供してきた。児童館を理解する地域の住民・団体からもつの活動は評価され確実に地域社会に根を張り始めている。

図1 児童館の現実 プラスとマイナス



しかし、児童館は子どもの総合的な施設として将来を展望できるか、あるいは子どもや地域住民の期待に添えない施設になるかは分かれ道にある。現状は二つに道の認識と選択にかかっている。図1を見てほしい。四角の隅に書かれているマイナス面からとらえるならば、第一に児童館が対象とする子ども人口の減少があげられる。子どもの賑わう姿が地域からもまた、児童館からも消えていっている。生活もけいこや塾で忙しく、これまで続けられてきた活動が継続できなくなっている。さらにはここ10年間の行政改革は児童館の仕事をセーブし、職員の労働意欲を低下させてきた。加えて、変化する現実に対して柔軟に対応する職員の意識構造の遅れや運営のマンネリ化が児童館をおもしろくないものにさせ、また地域からもさほど期待をもたれないものにしてきた。このまま推移すれば自治体が不況で財政的に苦しいときに何らかの方向転換が提起されてもおかしくない状態である。だが、一方では児童館に対する期待や願いも各方面から聞こえてくる。一つには子どもの少子化にとまなう国の1・53ショックである。93年の調査ではさらに出生率は1.50となり東京は1.1という数字まで落ち込んでいる。このまま放置はできないと国や都は子育て支援の施策を打ち出してきた。さらに92年から導入された学校5日制の実施にともない社会施設整備の必要性から、いろいろな意味で児童館に期待がかけられてきている。地域の目が児童館に向きはじめている時である。また、新聞・マスコミを賑わせる子どもに関する問題は「何とかできないものか」と社会世論にまで高められている。そして、最後に国会で批准された『子どもの権利条約』という子どもの人権思想の進展があげられる。児童館はこの考え方を取り入れることにより崇高で大きな世界的な理念をその活動やバックボーンとして持つことができる。

その意味で、これらのプラスの面を発展させれば児童館は大きな可能性を含んでいると言える。

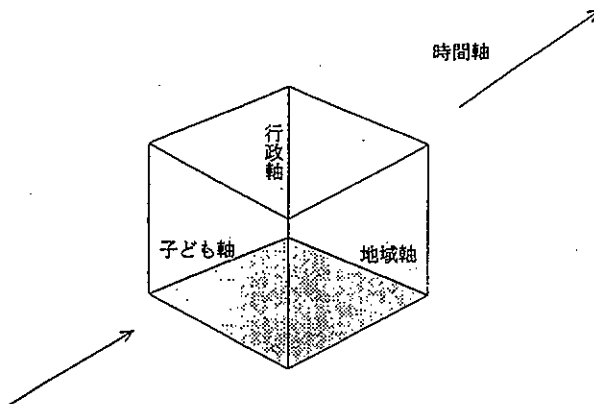
3. 今後の展望

児童館の今後の展望を考えた場合3つの軸から活動を組織することが必要である。一つには子ども軸である。これは児童館が子どもの遊びや自主活動のプログラムをいかに子どもの現実とマッチさせ、子どもの成長・発達に則してプログラムを企画できるからである。また、子どもの権利条約にある『子どもの最善の利益』を具体化した運営内容が組み立てられるかである。次に地域軸である。これは地域との結合・連携を推進させ、児童館を地域に根付かせる仕事である。地域に出るという行動から事業の共催、具体的問題解決へと様々なレベルでの結合が必要である。来館する子どもを中心にした活動のみでは地域の支持は得られず、現実には起きている子どもの問題は解決できない。

3つ目として、行政・組織軸である。この課題はこれまでの児童館活動のもっとも弱いところであり、理解が不十分なところである。本来、児童館活動と言えどもある組織体・行政体の目的のもとに運営されているわけであるが、現場にいる子どもとの関わりのみが中心の仕事であると錯覚し、自分たちには関係ないという意識を持ちやすくなる。このことが、組織・行政に対してのアプローチを怠り、結果として正当な評価を受けないことになる。

今、この3つの軸を構造的に考えて活動を組み、子ども軸を中心としながら地域・行政軸へと展開していくことが新しい児童館活動への未来につながると確信する。(図2)。

図2 児童館の活動軸を考える



報告2 世間様に役立つ子どもをめざして

新潟市立有明児童センター

児童厚生員 田中 純一

1. 待つ児童館から呼び込む児童館へ

有明児童センターは S.55 年 4 月に開設されたが、近隣小学校の児童数の減少により、小学生の来館者も 1 日平均 100 人から 78 人くらいに減少していった。その分を午前中の幼児の集いに力を入れていった。この結果総来館者数は極端な変化がなかった（1 年総来館者約 5 万人）。

平成 4 年度に入り、幼児の集いも月曜から金曜まで定着するようになった。火曜と金曜を除いてはほぼ自主活動に任せられることができるようになった。この時点で小学生の来館者数の減少は仕方がないことなのか、それとも児童センターに改善の余地があるのかが問題になった。隣の青山小学校は 1 学年 2～3 学級で、在籍数が合計 504 人の学校である。当センターの 1 日平均小学生 78 人の来館者のうち 80% が隣の小学校であり、約 62 人である。この青山小学校の児童 62 人という数字は（約 12%）少なくはないが多いとも言えないのではなからうか。こうした発想から、児童が来るのを待つのではなく児童センターのほうから呼び込む積極的な姿勢をとってみようと計画したのが平成 4 年度から 5 年度であった。

青山小学校が毎月第 2、第 4 土曜日が休みとなる指定校になったこと等により、校長先生をはじめ学校も児童センターの活動にきわめて協力的になってくれた。毎月発行する児童センターだよりを児童数だけマスパリントし、全児童に配布してくれた。また学校の担任等が児童センターの子どもの様子をよく見に来てくれるようになった。また夏休み中の学校のプール開放は児童センターに関しては何時でも計画に入れてもらってもよいことであった。（結局 4 回参加）

児童センターのほうからも児童センターの行事は職員が学校の玄関まで行ってチラシを配ったり、センター長や主任が学校を訪問し教員と話し合うようになった。

児童クラブの運営も保育から健全育成へと今まで以上に重点を移した。

職員勤務も半分のを 18 時までにした。（今までは 17 時 45 分）また第 2 土曜日と第 4 土曜日には子ども主体の魅力ある行事を取り入れた。遊具の充実をはかるとともに、利用者が気持ちよく利用できるよう屋内外の整備を進めた。小学生および利用者がみんなと仲良く遊べるように子どもによる遊びの組織化および遊びの交通整理をはかった。利用が増えたぶん児童館内外の清掃も、子どもおよび利用者が進んできれいにするように職員が一緒

になって掃除をするようにした。

このような努力の結果、小学生の 1 日の利用は平成 5 年 4 月～8 月までで 1 日平均 100 人となった。青山小学校児童の利用を 80% と見て 80 人、青山小学校児童総数 504 人の約 16% となった。また児童センター全体の利用としては中学生が 1 日平均 6 人、幼児 30 人、大人 32 人、ボランティア 4 人、その他 6 人が加えられ、1 日平均 178 人となった。4～8 月の開館日数 127 日 5 ケ月のべ総利用 22,565 人であった。

2. 多すぎて困ってきた

これらの努力の結果、利用者は増えた。有明児童センターは体育遊戯室を含め、633m² である。午後からの小学生が 100 人を超すと晴れのときは良いが、雨の降ったときなどは窮屈になってきた。職員の静養室もゲームの場所に開放しないとならないような状態も出てきた。633m² ÷ 100 人 = 6.33m² であり、1 人 2 坪弱の広さである。

近くの青山小学校が一番多かった時、S.46 年に 1 人平均床面積が 5.65m² で当時は超過密であった。保育園でみると当センターと一緒に経営の東小針保育園が現在 5.76m² となっており、かなりいっぱい状況である。しかし保育園は小さな園児であり、児童センターは小学生を対象とし、幼児や大人、中学生の来館も含めると午後からだけで 1 日平均 120 人ほどになる。また 1 日平均 100 人ということは多いときは 150 人来ることもあるわけで 6.33m² はある程度小学生の来館数としてはこれ以上を望むことができないのではないかと考えられる。したがって 1 日の児童館における小学生の利用は 1 人平均床面積が 8m² くらいが目安となるのではないかと私は思う。たとえば 240m² の児童館なら 30 人位の小学生の利用と午前中の幼児や大人の利用で 20 人、午後の中学生大人幼児の利用で 10 人と考え、1 日平均 60 人位が妥当な数字であろう。職員数は 2 名と考えてのことである。

利用者数については、狭山市の前児童福祉課長の野村さんが児童館 No.71 で述べていられるように年間予算を年間利用者数で割る方法もある。やはり 1 人 1,000 円以下にはしたいと私も思っている。

つぎにコストについてである。当センターの場合 572 円である。なお平成 3 年度公立小学校児童にかかったコストは 1 人 2,056 円であった。前記の 240m² で職員 2 名の仮想児童館の場合、総予算を当センターの 5 分の 2 とみて 1 日 60 人の 280 日開いたとして、681 円となった。こうした 1 人当たりのコスト（ex1000 円）小学生利用の 1 人平均床面積（ex8m²）、近隣小学校の児童数との割合

(ex12%)等の数字で示すことも今後の児童館運営についてぜひ必要であろう。

3. 利用が増えたそのあとは

児童の利用が増えてある程度の限度を越えた時点でのような児童館運営を行なうかが問題になった。①あまり宣伝をしない現状を維持する。②無理してでも利用を増やす。③児童館から出て行って地域と協力して健全育成を進める。④現在の利用者の活動が何らかの形で地域のためになるようにつとめる。

当センターでは③と④を採用した。地域に出ていくという点では、行事活動である有明クイズチャンピオン大会やミニミニ運動会を平成5年度より、児童センター体育遊戯室から青山小学校体育館に移した。それにより青山小学校の学校開放育成員5名のほか、20人程の父母の協力があり、200人規模の大会が300人規模にすることができるようになった。また“児童センターに泊まろう”の企画を海の家に変更して、多くの人が仲間になれるようにした。第4土曜日は児童クラブは野外遊びに行くようにして、中学生や一般の利用者が自由に使えるようにした。

4. 「世間様に役立つ子ども」を目指して

利用者(小学生)の質的向上をはかるという意味で、「世間様に役立つ子ども」といったことを考えてみた。有明児童センターの目的は児童の健全育成を通し、「地域の社会福祉の向上に寄与」することである。将来的に地域の社会福祉の向上に役立つのではなく、いま直接的にも地域に役立つ子どもに育てることはできないかを考えてみた。そうすれば児童館や児童センター、児童厚生員の社会的認知がすすみ、有明児童センター以外にもどんどん児童館が増えていくのではないかと考えたのである。子ども達の内的な欲求の中にも、単に自分が楽しければ良いといった段階から、他の人に役に立つのがうれしいといった要素がみられるようになったことにもよる。

最初に始めたのは保育園、乳児園、老人ホームへの子ども達による読み聞かせ活動である。年に6回ほど子ども達がやりたいときで、相手がOKのときにやっている。平均4年の夏休みからは半身麻痺の患者のためのトイレトーパー畳みを月に2回ほど始めた。綿菓子を作って近所に配ったり、西瓜を貰ってきて世話になっている回り近所に配ったりの活動をやって来た。このなかで大切だと私も子どもも感じたことは、簡単な作業をいかに完璧にしっかりやるのが大事であるかであった。掃除でも適当にやっていたら何も身に付かない。真剣にやり、

今日よりも明日が立派にできるようにを目指すといろいろなものが見えてくるのがわかった。

また子ども達の優しさも目に付く。障害のある子どもと仲良く遊ぶ。(障害児学級の児童3人がすべて児童クラブに入っている。)また簡単な登校拒否傾向の子どもは児童クラブの子どもに「面倒見てやって」と頼んでおけば、1人遊びの楽しさ、2人遊びの楽しさ、5～6人遊びの楽しさ、10～20人遊びの楽しさ、50～60人の大きな集団遊びの楽しさをそれぞれの能力に応じて遊ばせてくれるようになった。また5～8人くらい来る中学生も小学生と適当に力を抜いて遊んでくれる子どもになってきた。

簡単なことを真剣にやり、子どもが地域のかすがいとなり、地域が仲良くなるために子ども達は充分“世間様”に役立つだけでなく、新たに“世間様”を作っていくバネにもなるのではないかと私は考えている。

5. 最後に

有明児童センターの子ども達の変容は、児童館の新たな役割の一つの実験をしているように私は考えている。優しい子ども達とともに一緒に歩んでいきたいと思っている。

報告3 S区N町の児童館の状況

東京都品川区立西中延児童館
児童厚生員 鈴木 正一

1. はじめに

少子化の中で、各学年が3クラスから2クラスへ、2クラスから1クラスになって行くという現状で、子ども達の児童館来館率は減少がはなはだしい。

京浜工業地帯で、中小企業が多くたち並ぶ住宅密集地域でさえもこうした現状である。アパートからマンション化も進み、地価高騰で住みにくくなってきている。

そのような中でも乳幼児と母親は、集まる場所を求めて児童館へ集まる。母親に多くのストレスが集中するのか、雑談をする場として、趣味を生かす場としての児童館利用は年々高くなってきている。

2. 地域での遊びの拠点

子ども達も同じで、少ない友達と遊ぶには電話連絡も必要だが、集まれる場が町にあることは大きいことである。児童館は出入り自由で、そんな子ども達の待ち合せの場でもあり、たまり場である。何かをしようということの前に友達と出合える場である。狭い家よりは、はるかに良いことは子ども達は知っているようである。そし

て、集まることで遊びが始まるのである。また、年齢差のある子ども達が、互いの力や内面を知るうえで大切な場であり、同じ場において互いに見あえる、知りあえる、共に遊べるという発展さえそこにはあるのである。

そこで問題になるのは、「場づくり」をしているかどうかである。行事優先になりがちな昨今、どうしても手がかかると日常活動への取り組みは進んでいないし、指導員の力量の差が歴然なためか、区の中でもバラツキがあり、どうしても行事に追われる館が多いのである。

当児童館では、超異年齢集団づくりを願ってどんな子どもでも自由に遊べる場づくりを展開してきた。中でも自主クラブづくりから、より多くの子ども達で遊べるプレリーダーのいるスポーツクラブ等がその活動の特徴である。

ボランティア会もできて、現在36名のメンバーが入れかわり来ている。そのような青年達（15歳以上）が、子ども達に混って遊びの指導というよりは、友達づきあいをしている。

大きく分けると

1. クラブ活動 — 児童館と子どもと講師によるもので、現在は5クラブ あり。各週1回開催。
2. 自主クラブ — 子ども達自身が作っているもので、現在2クラブで各週1回開催。
3. 職員指導のクラブ — 1年生クラブと高学年の冒険クラブで、活動が自由な取り組みができる中身である。各月2回開催。
4. ボランティア会の主催するクラブ — 現在は1クラブあり。各週1回開催。
5. 母親達のクラブ — 現在は2クラブあり。各週1回開催。
6. 幼児クラブ — 乳幼児クラスと2歳クラスと3歳クラスがある。各週1回 午前中開催。

こうした活動の合い間にイベントが月1回程度計画されている。だが、一番力を入れているのは、これらのクラブ活動外の子どもの通常の営みとそれへの対応である。

ふらっと来る子どもも少なくなく、むしろこうした子は常連の子で、各クラブ活動に来る子は反対にそのクラブのある曜日、その時間しか来ない子が多い。そうした子ども達は日常的なつき合いが薄く、子ども同志の細やかな感情表現にも慣れておらず、相手のことを思えない、わがままな子が多いようである。

この二種類の子どもの達は、なかなか一緒にならず、別行動が続くが、同じ地域の子ども達であるので、できるだけ共に遊ぶ場を作るように努力している。

児童館の地域には学校が4校あり、その校区域の真中に位置するために4校の児童が来館するが、やはりまじりにくく、いつもその辺で悩みがあるのが現実である。

だからといって学校別に行事や活動をするわけにもいかず、強いて仲良くさせるよりもただ同じ場にいられるところからということで、対応も子ども達によってまちまちに行っている。個別に1対1で話すと、みんないい子達であるのに何がそうさせているのか、学年が高くなるほどそうした傾向がある。

中、高生になると、学校による対立があり、場所取りがさかんであり、児童館のバスケットゴールや広い部屋は、その力関係がよく見える場でもある。

3. ボランティア会 MOON

たまにしか来ない中・高生が来館すると、いろいろな問題が出てくる。小学生の場が自然になくなっていて、小さくかたまって不満そうに見ている。また、遊具がすぐにこわれてしまうことも事実である。

そのような中で、ボランティアの会「MOON」ができた。ボランティアセンターの体験ボランティアで参加した2人の女子高校生達を中心に、現在週1回、土曜日は必ず何人かが来館する。その他の日にも来られる人は来館し、子ども達の中に入っている。メンバーは現在36名が登録している。

中学生も自ずとメンバーに入って来て、みんなで遊んだり、話したり、ゲームをしたりといろいろな接点が出てきている。

MOONメンバー達は、自分自身を試す場と考えているらしく、活動目標や係まできめて、月1回のニュースづくり等も自分達の力で行っている。

こうした青年達の姿が、子ども達にどう映っているのか、何年かたつと彼等がメンバー入りするような流れができるかというと考えているが、まだまだこれからである。

こうした子ども達の縦の関係が長く保たれるように指導員も長く同じ館にいられるとよいのであるが、残念ながら5年前後で他へ移動してしまうのが実状である。

青年になると遊びよりは、訪ねてくる、相談にくる等、人に会いたくて来館するようで、その時に小さい頃遊んだ仲間や指導員がいないのが残念である。

4. 場づくりは街づくり

現在、時間延長を課内で話し合ったり、検討委員会ができて、その方向で進められてはいるが、中・高生達が児童館が開いていて良かったとはならないようで、青少年の場づくり、特に中学生の居場所としては、なかなか

その要求に応えられないのが現状である。

現在、西中延児童センターでは、職員の実力で5時過ぎも彼等・中高生につきあっている。そして彼等はボランティア会MOONのメンバーになって行く等、その発展は大いに期待される。時には受験の相談、就職の相談等もあるが、ほとんどは児童館の企画や運営にかかわることであり、またその仲間達の関係が深まるような中身が中心である。職員もボランティアで、時間的な問題はこれといって現状では良い解決がないのが悩みである。

そのような中でボランティア講座と銘ついた集りを企画した。土曜日の夕方からである。第1回はボランティアセンターからの講師を、第2回は学生時代や児童館をテーマにボランティア経験のある指導員の報告、第3回は大学4年生と他区の児童館職員、福祉工房の指導員を呼んでボランティアトーク、第4回は子どもの権利条約とボランティア活動をテーマに他館の指導員を、第5回は体験ボランティアシンポジウムで各メンバー達の番、第6回は最後に、児童館とボランティアをテーマにみんなで楽しく語り合う企画である。もちろんMOONと共同企画である。

夜型の社会生活が多くなってきた青年達や中学生達が利用できる場づくりはこれからである。ソファやコーナーを作って必ず話し合いにつきあったり、彼等の好む情報を知らせたり、楽器や音響器具を置いたり、たまりやすい場づくりが必要なこともわかっている。しかし、彼等が地域に帰ってくる時には児童館は閉まっている意味がないのである。学校5日制にともない、小・中学校からの帰宅時間はますます遅くなってきている。閉館時間延長がこれからの児童館活動の発展の鍵である。

5. 子どもネットワーク会

こうしたいろいろな問題をかかえる児童館が呼びかけ、子ども関係施設、保育園や図書館、保健所、都の養護施設等現在11館で月1回の会を行っている。また会のお知らせも出している。

地域全体で子どもの問題を考え、実行しようという試みである。初めに乳幼児プール開放を全体で取り組み、親達からは安心感があると区の姿勢に対して良い結果を得られている。4月から始まったばかりでこれからであるが、子育てでニュースも発行予定である。

しかし現状では区内十分の一の地域でしかなく、活動の広がりや町の他の施設や人とのつながりを強化しようという声も上っている。またその集りに参加している人々からは、他の職種の仕事内容が少しずつ見えてきたとの意見もきかれた。

いずれにせよ、地域の児童館の役割はいろいろあり、多くの可能性をもっている。学校や幼稚園、病院や障害者施設とのつながりも進んでいるが、私どもの事業は子どもを取り巻く大人達からまずつながろうと今年度から具体的に動き出したばかりである。

児童課長がゴーサインを出してくれたことに全ては始まっていることが指導員にとっては大きく、また他施設からの信頼もでき、街の中で児童館の存在も少しずつではあるが変化してきている。商店会連合会や町会、町の子ども団体やグループ、警察や消防、都区の各課との連携した事業も増えている。何よりも大切な「子ども」という所でつながってきたことで、これからはまさに主人公の子どもの声をどのように町に反映させて行くかが大きな課題でもある。

報告4 子どもと家庭のためのデイサービスセンターとしての児童館

— 孤立をつなげる児童館活動（登校拒否児親の会の組織化支援）—

東京都板橋区立あやめ児童館

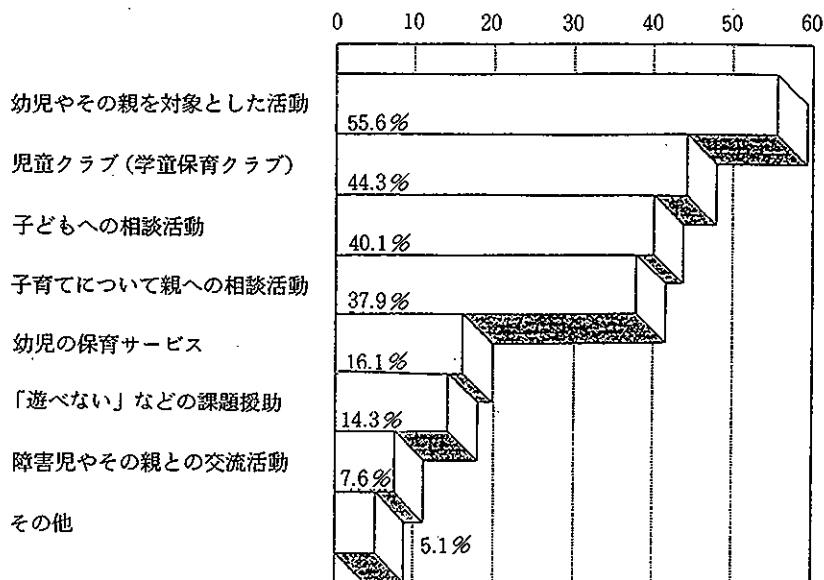
元 児童厚生員 西郷 泰之

●児童館は地域のデイサービスセンター

最近の全国児童館連合会のまとめた資料によると、児童館は生活支援、組織化、健全育成の3つの機能を持つとされている。これらの機能のうち健全育成機能についてはこれまで様々な実践集等で紹介されてきた。また、それにとりまう組織化機能についても取り組みは弱いものの一定の成果をあげてきたことは事実である。しかし、生活支援機能についてはこれまであまり焦点を当てられてきたとは言えない。古くは学童保育クラブ事業にはじまり、共働きの家庭の子どもたちの豊かな放課後の保障をしてきたのは衆知のことである。

しかし、児童館は地域のデイサービスセンターとしてこの外にも様々な活動を展開していることはあまり知られていない。平成4年に行われた全国調査（図3参照）を見てもその多様さがみてとれる。地域のニーズ把握や社会資源等の状況を踏まえた地域診断により地域の特性に応じた活動を始めていることがわかる。現在最も活発に推進されているのが、幼児やその親への子育て支援活動である。その他子どもや親への相談活動、保育サービス、遊びの援助、おもちゃ図書館などの障害児やその親との交流活動が続く。そして、その他のなかに1%程度とまだまだ件数は少ないが、登校拒否の子どもやその親たちへの活動が確実に広がり出している。本稿ではデイサービスセンターとしての児童館活動の一例として板橋

図3 児童館の生活支援活動



「地域における児童の生活文化に関する研究」伊藤忠記念財団、1993年。

区立高島平あやめ児童館の登校拒否児への活動を紹介することで、生活支援事業の課題を明らかにする機会としたい。

●1クラスに1人の長欠児

平成元年当時、板橋区立高島平あやめ児童館の最寄りの公立中学校でも、ほぼ1クラスに1人の割合で長期欠席児またはそれに準ずる子どもたちがいた。約20名もである。児童館に来ていたA君の登校拒否をきっかけに生活指導担当教諭や養護教諭からの情報や、児童館に遊びに来ている中学生たちに丹念に聞いた結果である。このうち、7名までが児童館に関わりがあった子どもたちだった。地域の児童福祉施設である児童館としても、無関心でいられる状況ではなかった。

登校拒否の中学生がはじめて児童館に来たのは1986年だった。登校拒否の子供達の存在は知ってはいたが、本当に青白い顔をして児童館に来て学校に行かずに児童館に来た時はびっくりした。学校に追い返すわけにいかず、かといって午前中から児童館にいることは学校との関係でまずいような気がしていた。とりあえず、彼らの言い分を聞き、あるがままを受容することに努めた。そんなことが半年続くなか、学年が変わりクラス替えや担任の教師も代わり、学校に行くようになった。あまり積極的な関わりができなかったこと、児童館だけで関わりき

れる問題でもないということもあり、どうも歯切れが悪いとあえずの暮切れだった。

その数年後、新たにA君が登校拒否していることがわかったのである。そこでまず、登校拒否なるものを理解するため資料の収集をした。一方で、地域の中学校の生活指導担当教諭や児童相談所の児童福祉司、登校拒否に積極的に関わっている広島市安佐南区社会福祉協議会、登校拒否指導学級の教諭、保健婦、そして登校拒否児父母の会、などに話を聞きに行った。登校拒否児やその親の気持ちや実状、そして児童館に何ができるかについてである。いろいろな立場の人に共通のことは、①登校拒否の子どもたちの居場所として児童館は有効、②地域で孤立化している親御さんのネットワーク化・組織化なら児童館でも可能であるとともに、家族の安定にもつながる、の2点だった。

●あっという間にグループ結成

以上のような関係者への聞き取りを基に、児童館としての支援内容を職員会議等で検討した。その結果親同士をつなげることから始めることにした。懇談会を開くにあたっては、地域の中学校や保健婦、児童福祉司に相談するとともに、懇談会の核になってもらえる人探しも事前に行った。A君の母親も核になった一人であった。児童館で把握していた3人の親御さんとその知人に連絡し、

第1回目の懇談会をもつことになった。平成2年の3月のことである。3回目の会合で2人の世話人が選出され、月1回の例会開催の決定、会の名称も「グループあれやこれや」と決まった。この時点で児童館主導の懇談会はその目的を達成し、これ以降児童館は親の会の自主運営を支援する側にまわることとなる。

「グループあれやこれや」の旗揚げ興行とも言える活動は講演会だった。元夜間中学の教諭で現在は昼間の中学の教諭をされている松崎運之助氏の講演会を開催することだった。同じ地域で登校拒否について孤立して悩んでいる、子どもや家族がネットワークをつくることで支え合えるよう広く参加者をつくり、かつメンバーの募集も兼ねた企画である。5月中旬の土曜日に行き、約50名の参加者があった。登校拒否児の親約30名、中学の教諭5名、小学校の教諭3名、保健婦1名、児童館職員4名、その他5名だった。ネットワーク作りもでき、4人の新メンバーも加わり目的は達せられた。最初からのメンバー6人と新しいメンバー4人の10人で再スタートし、夏には地元板橋で開かれた教育科学研究会の全国大会に参加、親の会の交流会もセットするなどの活動もした。また、子どもたちの立場を理解しようと、11月には登校拒否児が多くかよっている夜間中学の見学会も行うなどした。そして、毎月の例会はメンバーの相互相談の場として機能している。

●だんだん関わりが、しかし課題も山積

ここで子どもたちとの関わりについて触れておこう。2人の登校拒否をしている小学生が児童館にときどき遊びに来るようになり、マンガを読んだり職員とローラースケートやユニホックをするなど関わりができていた。また、地域の遺跡発掘体験活動や迷路などの児童館行事に参加したり、企画や準備段階から関わる子どもたちも出るなど、徐々にではあるが家庭外での居場所として児童館が活用されるようになりつつある。児童館として登校拒否児のための特別な事業や活動は用意しなかった。学校に行っていないと普通の子として付き合うようにした。特別扱いをすることで、登校拒否児本人や周囲の子どもたちにかえってギクシャクした関係にならないよう配慮したつもりである。

しかし、課題もまだ多くある。ここではその主な3点について紹介することとしよう。

まず第一点は学校との関係である。保健所や児童相談所等との関係はいいのだが、学校との関係があまりよくない。親の会の発足当初は相談に乗ってくれたり、学習会に参加してくれた学校であるが、親の会のメンバー数

が多くなるにしたがって警戒感を強めているようだ。学校への批判勢力として認識しだしたようなのだ。親と教師の信頼関係の確立のためどんなことを児童館はすればよいか大きな課題である。

第二点目は登校拒否の子どもたちの居場所に児童館がなり切れていない点である。児童館が地域に設置されているがゆえに学校の友達と会ってしまうなどの理由で、まだまだ来館する登校拒否の子ども数が少ない。運営上の工夫、例えば開館時間の延長や午前中の利用なども検討の必要があるのかもしれない。

そして第三点がプログラム開発である。幼児から小学低学年までのプログラム開発はされてきても、小学校高学年から中学生・高校生までの子どもを対象としたプログラムについては児童館はいまだ蓄積は少ない。ボランティア活動と音楽バンド活動程度である。子どもたちの関心分野に沿ったプログラム活動の開発についてはこれから大きな課題である。

考 察

次に、以上4ヶ所の児童館の児童厚生員からの報告をもとに、現在の児童館活動についての考察を述べる。

児童館活動の評価は、そのものが地域の児童の遊びに対するニーズをいかに充たしているかにあるわけである。つまり、児童にとって児童館が、遊びたい時、遊びたい遊びを、遊びたい相手とどの程度遊べるかということによって、評価がなされるわけである。そこで、ここでもそうした視点から児童館の活動について考察することにする。

しかし、児童の遊びに対するニーズは様々なものがあり、そのものは遊びの種類によっても当然異なるし、児童館において児童の全ての遊びのニーズが充たされると思われない。あくまでも「地域の児童の遊び」が中心になることは言うまでもないことであり、遊園地や家庭での遊びまでその中に含めることは到底できないし、また含める必要もないはずである。

更に児童館の場合、こうした児童の側のニーズだけでなく、そのものが親や社会の側のニーズにも応えなければならない使命を帯びた存在であることを前提に、その活動について考えていかなければならないのである。

そこで今回の報告からの考察に際しては、児童の側のニーズと親や社会の側のニーズの両面から、その活動についての評価や問題点について考察することにした。

第一に、児童が遊びたい時に現在の児童館は遊ばせてくれるかということである。この問題については、以前

から開館日や開館時間が児童のニーズに応えたものでないということが指摘されてきたが、現在でも依然としてその問題は解決されていない。館員の勤務時間の延長は、今のように2名～3名という館員数では交替制もとれず、結局は休日休館や5時閉館という体制から脱却できない館が少なくないのは当然である。ボランティアの応援などにも限界があり、留守家庭の児童などの期待に応えるには程遠いのが現状である。児童の健全育成の拠点としての児童館としては早急な解決が望まれよう。

第二の児童の遊びたい遊びができるかということであるが、この問題についても児童館の施設の貧弱さ、館員のマンパワーの不足、管理の厳しさなどがネックとなり、必ずしも児童のニーズを満足させていないのが現状である。子どもが主体性をもち、活発な遊びを自由に展開することができない限り、児童館が児童にとって魅力ある存在になることは不可能である。このことは今回の報告書の中でもさかんに指摘されており、子どもの遊びを大きな制約の下でしかさせられない館員の焦立ちが強く感じられる。

しかし、一部で行われている地域の小学校や中学校の校庭開放やプールの開放は、児童館の遊びの内容を非常に充実したものにしており、こうした難しい問題の解決にも大きな希望を与えてくれている。

第三の遊びたい相手が児童館で得られるかという問題であるが、現在の児童館ではこの点についても大きな制約が伴っている。年少児が期待する年長児はなかなか姿を現わさないし、地域の青年や大人達の参加もごく限られた館に止っている。今回の報告例の中にも児童館OBやOGの参加が記されており、非常な力となっているが、そうした人々の協力が得られない限りこの問題の解決は困難であろう。中学生や高校生のジュニアリーダーとしての参加や、また学生や一般地域住民の協力が得られている児童館の活動は、その内容においてはるかに充実したものになっている。

第四には、現在の社会の需要に応じた活動が行われているかということであるが、今回の報告にも学童保育や不登校児を対象とした活動もみられ、その活動の輪は徐々にではあるが広がっている。もちろんこの場合も、教育関係者や行政機関などの理解と協力が得られることがぜひ必要であり、地域住民の参加とも相俟ってこそ、地域の児童センターとしての真の役割を児童館が果たすことが可能となり、名実ともに児童健全育成の拠点ともなり得るのである。

児童館の使命がいかに大きなものであるかということをも今回の報告書は示しており、単なる遊び場としてではなく、報告にもあるように、社会に役立つ児童の育成をめざしている児童館の存在は、次の社会のよき後継者の育成の貴重な場となるものなのである。

おわりに

子どもの健全育成に欠かせない遊びが、生活環境の変貌とともに、近年著しく変容するに至っている。本研究ではこうした状況にある子どもの遊びを活性化させ、地域社会における新たな子ども集団の形成を担う場として児童館活動に焦点をあて、次のような調査研究を進めてきた。まず、一昨年は東京都内の4カ所の公立児童館を利用する子どもたちの意識や児童館に対する意見をアンケート調査し、地域の子どもの児童館とのかかわりについて考察した。また、昨年には児童館の職員（主に児童厚生員）を対象とした意識調査を実施し（616カ所）、活動の現況や問題点などについて検討を行った。本年度は子ども自身の考える遊び観や地域とのかかわり、さらには児童館についての率直な意見を聴取するとともに、いくつかのケースを取り上げ、児童館活動の抱える問題点や今後の課題について検討した。その結果、子どもの遊びについての意見や考え、さらには地域にある児童館への関心など、一部ではあるが明らかになっている。また、ケースを通してみると、増加傾向が見られる登校拒否児童や近年希薄になりつつある地域社会とのかかわりやそのあり方など、今日的な課題を抱えながらさまざまな活動に取り組んでいる姿を認めることができる。その一方で、子どもの多様なニーズや児童館の果たすべき役割は何かをいま一度考える必要のあるものなど、なお課題の残るケースも一部に見られた。

いずれにせよ、子どもの生活空間としての遊び環境が次第に変化する中で、それを十分に保障するための児童館の果たす役割は少なくない。今後は子どもの視点やニーズに応じた遊びとそのため空間の提供、さらには地域社会と有機的に結びついた新たな児童館活動の創出が今後より一層求められてくるものと思われる。

参考

1. 『日本総合愛育研究所紀要』第28集, 1991年
2. 『日本総合愛育研究所紀要』第29集, 1992年